

シビルウエディング・
ミニスターが語る

心にかける挙式

私に「シビルウエディング・ミニスター」の仕事しようと思いをもちましたのは、月刊「ホテル旅館」の片すみにあった小さな記事でした。そこには挙式を司る意義とミニスター養成のための、第1回セミナーが開催されたとありました。私はその場で電話をして、次回のセミナー参加を申し込みました。

ホテルの経営に関わっている私が常々気にしてきたの

は、結婚式における両家の両親をどのようにアテンドするかでした。

「新郎新婦を育ててきたのは、まさに両親であり、この日を迎えることができた最大の功労者はいうまでもなく両親で、さらにふたりが結ばれることによって両家は親族になる。そのことを尊敬をもって表す儀式を何とか挙式のなかにとりいれたい」

かねがねこう考えてきた私は、挙式を司るミニスターの資格取得を機会に、これを結婚式の第一義にしました。

弊社の近くには「昭和村」というテーマ・パークがあります。

シビルの挙式を希望するカップルの多くが、昭和村を舞台に白馬に乗った花嫁が式場

子を思う親心はいずれも同じ

に向かう花嫁行列の挙式を希望します。

行列が挙式の場に到着すると、まず両家の両親が「親族の契り」のために用意した2本のトーチに灯る火を中央の大きなトーチに移します。

新郎新婦は、両家がひとつになった象徴のトーチから3本のトーチに火を移します。最初のトーチは、両親への感謝の灯火。次のトーチは、これまでお世話になったみなさんへの感謝の灯火。最後は、2人の前途に対する希望の灯火を意味し

ます。

これまで200組を超えるシビルの挙式を司りましたが、その中にドイツ人の男性と結婚する女性の挙式がありました。式の前日、私は新郎新婦の父親たちに「挙式の中で父から息子と娘に贈る言葉を手紙の形式で述べてもらえないか」とお願いしました。両方の父親は、「それでは今夜、

息子への手紙、娘への手紙を準備します」と、快諾されました。式が進み、まず父から息子へ贈る手紙の朗読が始まりました。もちろん、ドイツ語です。

私だけでなく、列席者のほとんどがドイツ語をまったく解しません……が、息子を思う父親の気持は、全員に十分伝わりました。

新婦のお父さんは、遠くドイツへ嫁ぐ娘に、「グローバルな視点をもつ娘に育てようと、早くから諸外国へ出しました。それがこういう形で実ったことを喜んでいますが…もはや外国は遠くありません。『これからはいつでもドイツへ行けるネ』と、母さんと喜んでいきます」明るい口調

で述べました。

挙式終了後、新郎新婦に感想を伺うと、異口同音に「父の言葉に感動した」「日頃からこんな思いでいてくれたのかと再認した」「勇気づけられ、これが一番お祝いでした」と感激の表情で言いました。

それらの感想を聞いた私は、常日頃から結婚式を挙げる男女に、「結婚式は2人だけのためにやるものではない。両家が親族となる大切な儀式でもあるので、ご両親の立場を十分に考慮しなさい」と何度も念をおしてきたことが間違いでなかったと確信しました。



シビルウエディング・ミニスター
本田 敏彦氏

(ほんだ・としひこ 1943年愛知県生まれ。「シティホテル美濃加茂」代表取締役。挙式回数220組)



2009.05.16